

変わる社会、変わりつつある会社

清水 ちなみ

男女雇用機会均等法の制定から30年。時の経つのはあっという間です。

私がコンピュータ会社に入社したのは1984年。理由は男女同一賃金だったからです。当時の日本経済は急上昇を続け、会社は女性の労働力を必要としていました。

しかし、翌85年に均等法が制定されてからも、会社は何も変わりませんでした。妊娠した女性が出産後に十分な休暇を取り、復帰したときに元の部署に復帰できる会社はごく少数派。赤ちゃんを保育園に預けるのも、学校に行く子どもにもたせるお弁当を作るのもひと苦勞で、多くの女性が体力と気力の限界を感じて退社せざるを得ませんでした。子どもをもつ女性が会社で普通に働くことは、2015年の今もなお、充分には実現されていません。

このように、働く女性の環境は一見、何も変わっていないように見えます。でも、実際にはすべてが急激に動いているのです。

私たちの世代が入社した30年前、課長は必ず男性で、必ず結婚していて、妻は必ず専業主婦でした。会社には若い男と若くない男、そして若い女がいました。若くない女はごく少数でした。私たちは上司のことを「おじさん」と呼んでいました。おじさんたちは、家では妻に、会社では庶務担当のOLに面倒を見てもらっていました。女性の上司はほとんどいません。「おばさん」は存在しなかったのです。

一方、30年後の課長は男性とは限りませんし、結婚しているとも限りません。専業主婦の妻がいる割合は激減しています。若い男性社員が、女性の上司を陰で「おばさん」「ババア」と呼ぶことはごく普通。女性が定年まで働くことも珍しくはなくなり、その分、かつて傍若無人だったおじさんたちも、自分のことを自分でする割合が増えました。日本の会社はこの30年でずいぶん普通になったのです。

男だろうが女だろうが、大人が働くのは当たり前です。環境が整わないことを嘆く前に、結婚するしない、子どもをもつもたないを自分で決め、生き抜くために知恵を絞ることが大切だと思います。



PROFILE

しみずちなみ：コラムニスト。東京都出身。青山学院大学文学部卒業。1984年にコンピュータ関連会社に入社し、在職中に『週刊文春』で「おじさん改造講座」の連載を開始。1989年退社。著書に『大失恋。』（扶桑社、1996）、『仮定の医学』（幻冬舎、1998）、『お父さんには言えないこと』（文藝春秋、2000）など多数。